相手の情動に働きかける５歳児の非言語コミュニケーション
― 幼稚園における行動観察を通して ―

阪本　満[*]・田爪宏二[**]
（[*]関西保育福祉専門学校，[**]京都教育大学）

The Impact of Noverbal Communication on Emotion of Peers in Five Year Old Children
― A Behavioral Observation Study in Kindergarten ―

Mitsuru SAKAMOTO, Hirotsugu TAZUME

抄　録：本研究は，幼稚園の５歳児における，非言語コミュニケーションが幼児の関係性の基盤となる情動に作用する役割について明らかにすることを目的とした。幼稚園において幼児の動作，表情，沈黙，身体接触，周辺言語に着目した非参加による行動観察を行い，フィールドノートをもとにエピソード記録を作成し，分析の対象とした。

その結果，非言語コミュニケーションには (1) 情動を共振・共鳴する，(2) 情動を喚起する，(3) 情動の強弱に作用する，という３つの役割があることが明らかになった。また，非言語コミュニケーションは，文脈や状況の中で非言語的情報と言語的情報とが相補的に作用しながら成立していることが窺われた。さらに，非言語コミュニケーションの情動への作用のしやすさは，幼児同士の仲間関係と関連していることが示唆された。

キーワード：非言語コミュニケーション，情動，仲間関係，幼稚園の文脈

Ⅰ．問題と目的

1. 幼児期における非言語コミュニケーション

我々の日常生活におけるコミュニケーションでは，Mehrabian（1981）が示すように，言語的情報と共に，それ以外の非言語的情報（聴覚情報や視覚情報等）が相手に強い影響を与えることが知られている。非言語的情報が含まれた行動，すなわち非言語的行動（例えば，顔の表情，身振り，体の触れ方，体の動き，姿勢，声のトーンや大きさや声色等）によるコミュニケーションは非言語コミュニケーション（nonverbal communication）と呼ばれており，言語によるやりとりよりも，相手の思っていることや考えていることが捉えやすいとされている（Navarro & Karlins, 2008）。

幼児期においても非言語的行動の果たす役割は大きい。幼児同士のコミュニケーションの成立は表情，身振り，物理的・活動的な文脈によること（無藤，1997），幼児が情報の信頼性を判断する際に非言語的情報を利用していること（Koening & Harris, 2005）や，語用障害のある幼児のコミュニケーションにおける応答の低さ（Warlaumont, et al. , 2014）等の知見からも，幼児は相手の意図を理解するのに言語そのものの意味だけに頼ることは少なく，非言語的情報を手がかりにコミュニケーションをしていることが窺える。

2. 園生活における情動と非言語コミュニケーションとの関連

幼児期において非言語的行動が重要である理由として，言語によるコミュニケーションの不十分さとともに，この時期のコミュニケーションにおける情動の影響が挙げられる。幼児期において，情動は幼児同士のコミュニケーションを進行する役割があり（本郷他，2021），コミュニケーションの基底かつ本質であるとされ（鯨岡，2006），幼児同士の関係性の構築にも深く関与している（野澤・西田，2021）。仲間や保育者との関係の中で様々

な情動を経験・表出し，情動体験に影響を与えている幼稚園や保育所等（野澤・西田，2021）において，幼児のコミュニケーションと情動についての様々な研究がなされている。例えば，保育者の介入が子どもの情動発達を促すことが示されている（松原・本山，2019；水津・松本，2015；田中，2013）。これらの研究では，ネガティブな情動（怒り，恐れ，不安等）を表出する幼児に対し，保育者の情動の緩和・状況転換・敢えて何もしない等のかかわりが，情動調整を促進させることが明らかにしている。また，保育者のみならず，同輩や異年齢の幼児同士のやりとりも情動の発達に大きな影響を与えている（森田，2005）。このように，幼児の関係性の構築に深く関与する情動は，幼稚園や保育所等での保育者や仲間とのコミュニケーションの中で育まれているのである。

ここまで情動とコミュニケーションの関係について述べてきた。では，言語に頼らないコミュニケーション，すなわち非言語コミュニケーションが情動にどのように作用しているのだろうか。勝野（2019）は，5 歳児の仲間関係のやりとりにおける情動調整について言語・非言語的行動を含めたエピソード記述により明らかにしている。しかし，ここでは非言語コミュニケーションを含めてはいるものの，主に幼児の言語によるコミュニケーションに着目した記録である。情動は生きた身体から表出，感応されるものである（鯨岡，1997）ことから，情動を介したコミュニケーションにおいて，非言語的情報は言語的情報に劣らないか，むしろそれ以上の意義をもつと考えられる（鯨岡・鯨岡，2001）。つまり，情動が関係性の基底となっている幼児期においては，その情動と親和性の高い身体によるコミュニケーション，すなわち非言語によるコミュニケーションが非常に重要である。しかし，幼稚園や保育所等の幼児の非言語コミュニケーションに着目し，それが相手の情動にどのように作用したのかについての検討は充分にされていない。

そこで本研究では，幼児の非言語的行動が相手の情動に作用した場面に着目し，その役割，すなわち非言語コミュニケーションが相手の情動にどのように作用するかについて検討することを目的とする。本研究では特に，幼稚園の 5 歳児（年長児クラスの幼児。誕生日を迎えた 6 歳児も含まれるが，本稿では 5 歳児と表記する）に注目する。5 歳児の非言語コミュニケーション，情動にはそれぞれ次のような特徴が見られる。まず，5 歳児という時期はそれ以前に比べて非言語的行動が増加し，その種類も多彩になると考えられる。例えば，5 歳児は心の理論の発達に伴って相手を意図的に操作するような行動をとるようになり，また意図的な表情操作（Kromm, et al. , 2015）や，自らの感情に対応して顔の各部位を正確に操作することができる（Gosselin, et al. , 2011）等の知見から，5 歳児が様々な表情を意図的かつ正確に表出することができることが分かる。また，5 歳児は共通の目的に向かって思いや考えを仲間と共有しながらやり遂げるようになる時期であり（文部科学省，2018），仲間とのコミュニケーションが活発になるのに相まって言語的情報に付加される非言語的情報も多彩になることが予想される。また，情動の発達については，5 歳児は自律的に調整する力が育ってくる時期であると考えられる。例えば，3 歳児や 4 歳児は自律的に情動を調整しにくく，いざこざも多くなる（高濱・無藤，1999）のに対して，5 歳児は仲間との関係の中で自身の情動を調整することができるとされている（勝野，2019;吉田・竹村, 2016）。このような5歳児の非言語コミュニケーションと情動の発達についての知見を踏まえ，本研究では5歳児に着目することとする。

3. 本研究の目的

以上に挙げたとおり，幼児期の関係性の基底となる情動に非言語コミュニケーションが関与し，特に 5 歳児はその役割は大きくなると言えるが，幼児間の非言語コミュニケーションの情動への作用に着目した研究は見当たらない。また，幼児の生活における非言語コミュニケーションとその役割の実態を明らかにするためには，非言語コミュニケーションを主眼とした自然観察を行ない，そこにおける文脈を含めたエピソードとして描き出す必要があると思われる。

以上より本研究では，幼稚園の5歳児の自由遊び中の相互作用の場面を中心に観察し，幼児の非言語的行動が他児の情動に作用した場面を抜き出し，幼児間の情動に働きかける非言語コミュニケーションの特徴とその役割について考察することを目的とする。なお，本研究では，幼児間の相互作用における非言語コミュニケーシ

ョンをRichmond & McCroskey(2004)の定義に従い，「一方の幼児が発信する非言語行動を，受け手の幼児が解釈すること」とする。この視点に基づき，研究方法の節に示す行動に注目して観察を行なう。一方の幼児の発信した非言語行動を受けた幼児の情動に変化が生じたと読み取れた場面を，非言語コミュニケーションが情動に作用した場面と捉えて検討する。そこにはある程度観察者の主観的な解釈が介在することになるため，分析のための資料の収集方法として，対象の詳細な言動の記録とともに現場にいる書き手が感じた体験を含めて記録しそこから読み取れることや解釈出来ることや観察者が感じたことなどを考察する形式のエピソード記録（田爪，2018, 2022）を参考にする。

Ⅱ．方法

1．観察方法

（1）観察対象

A市内の幼稚園における5歳児2クラスの幼児（男児24名，女児24名）。当該の園では自由保育を中心とした保育形態をとっている。なお，幼稚園に対しては研究内容等の説明をおこない，観察及び論文の執筆について承諾を受けた。

（2）対象観察期間

20XX年4月～20XX年12月，週1回，計20回。1回あたり午前9時から11時までの保育時間における観察を実施した。

（3）記録方法

非参加観察により，記述による観察記録を行なった。観察終了後，観察記録を元にエピソードを記述するフィールドノートを作成し，これを分析対象とした。

2．観察の視点

本研究では，非言語コミュニケーションを観察するための指標となる具体的な非言語的行動として，幼児期の社会的相互作用に関する先行研究を踏まえるとともに，行動観察において捉える際に有効であると思われた非言語的行動に着目することとした。その結果，本研究における最終的な観察の視点は以下の通りであった。

動作　子どものからだの動きや，からだとからだの作用が遊びや人との関係づくりに深く作用していると考えられることから（無藤，1997；砂上，2003），粗大な動作や姿勢や身体の向き，微細な所作等で表現されるものを視点とした。

表情　3～4歳で感情とは異なる表情を見せたり，4～6歳になるとみかけの感情と本当の感情の区別がつくようになる（浜名，2022）。そのためツールとして表情を使用する可能性も高いため，観察の視点とした。また，共同注意等，視線も重要なツールの1つであると考えられることから，表情に含めた。

沈黙　Vargas(1986)によれば，「無言で居ること」は一つの強力なコミュニケーション手段であるされるため，観察の視点とした。

身体接触　幼児期の非言語コミュニケーションとして身体接触が用いられていること（渡邉・鈴木，2022）や，5歳児が身体接触を暗黙的かつ巧みに道具的な手段として用いている（藤田，2011）という知見を踏まえ，観察の視点とした。

周辺言語　乳幼児の自己発達において声のトーン（高低域）に着目した野澤(2011)や，幼児が発話リズムや笑いを含めた「からかい」「ふざけ」が他者関係の構築に寄与する牧(2009)からも，声のトーンや声量，リズム，笑い声なども観察の視点とした。

3. 分析方法

フィールドノートの記録を元に，一方の幼児の発信した非言語行動を受けた幼児の情動に変化が生じたと読み取れた場面を，非言語コミュニケーションが情動に作用した場面とし，それらの場面を含んだ事例（エピソード）を抽出した。抽出した事例は全部で18であった。事例同士を相互比較し，相手の情動に作用する非言語コミュニケーションの役割という観点から類似の事例をカテゴリーとして集約した。

Ⅲ. 結果と考察

1. エピソードの分類

抽出された事例を相互比較し，相手の情動に作用する非言語コミュニケーションの役割という観点から類似の事例をカテゴリーとして集約し，表1に示すカテゴリー名を付与した。以下では，各カテゴリーについて下位カテゴリーを示すと共に，特徴的なエピソードを挙げながら検討する。

表1　相手の情動に作用する非言語コミュニケーションの役割

カテゴリー名	定義	事例数
共振・共鳴	相手と情動を共有し，維持したり高め合うような役割	9
情動の喚起	相手に新たな情動を生起させる役割	6
情動の強弱への作用	相手の情動を強めたり弱めたりする役割	3

2. 非言語コミュニケーションの役割ごとのエピソードの分析

(1) 共振・共鳴

非言語コミュニケーションによってお互いの情動を共有したり，情動を調整し合うなど，相手と同調する役割を果たした事例である。具体的な非言語的行動として，動作や表情，周辺言語（リズムや声量）を用いていることが窺われた。

ア. 相手とリズムを合わせ，動作を繰り返す

エピソード1　ブランコに乗ることよりも3人でいることが楽しい（10月）

【背景】

園庭のブランコが塗装し直され，幼児から人気の遊具となっているが，2台しかなくて常に順番待ちする幼児がいる状態である。この日もブランコを漕いでいる2人の男児のところに，A子，B子，C子がやってきた。3人は仲良しで一緒に遊ぶことが多い。

【エピソード】

ブランコの順番を，A子，B子，C子が待っている。ブランコを漕いでいる幼児に対し，3人は両手をつなぎ，手を振りながら，「かーわって！かーわって！」とリズムよく言い始める。次第に3人の手の振りが大きくなり，声量も大きくなって「かーわって！！かーわって！！」と叫ぶようになる。3人とも笑顔でとても楽しそうにしている①。

A子「かわってくれないねぇ，じゃあ，小さい声で言ってみようか」と相談し，今度は，「かーわって，かーわって」と声のボリュームを落とし，手の振りを小さくし，肩を寄せ合い寄り添うようになりながら，繰り返す②。ブランコの乗り手はそれでも代わってくれない。しかし，3人にはそのことを気にしたり，不満をもったりするような素振りは見られない。それどころか，3人は常に笑顔であり，動きや声を合わせるのが楽しい様子が伝わってくる。そのまま3人はブランコの場から離れ，隣の総合遊具に登って遊び出した。

エピソード2　大型積み木でのシーソー遊び（12月）

【背景】

遊戯室で，男児と女児合わせて7～8人が木製の大型積み木で乗り物を作って遊んでいる。D子とF子も乗り物の場で遊んでいたのだが，飽きてきたのか少し離れたところに移動し，大型積み木で別の遊びをしようとする。

【エピソード】

三角形の大型積み木の上に縦長の板をバランスよく乗せ，シーソーのようなものを作り，その板の両端にD子とF子が座る。お互いに相手のリズムに合わせて脚で床を押して身体を浮かしたり，反対に沈めたりしながら，シーソーのようにギッタンバッコンと交互に上下させている。笑顔でお互い顔を見合わせながら「きゃー」と叫び，とても楽しそうである③。

エピソード1では，A子，B子，C子は初め，ブランコの乗り手である男児に対して交代を要求するセリフを言っていたのだが，声量や手の振りが次第に大きくなったり（①），声量も手の振りも小さくなったり（②），3人で動きや声のリズム，声量を合わせること自体が楽しくなって快の情動が身体と身体で響き合っている（砂上，2021）ように感じ取られた。「かーわって」という言葉は，同じ言葉を繰り返し発話することで，その言葉の意義的意味が喪失して単なる音の連なりとして認知される「意味飽和（semantic satiation）」（岩田，1990）の状態となっており，言葉のリズム自体を楽しんでいるように捉えられた。

エピソード2では，相手と違う動きを交互にリズムよくすることでシーソー遊びとして成立させており，また笑顔や笑い声を通してお互いの楽しさを共有している（③）ように感じられた。砂上（2021）は，快の感情を伴って笑い声や身体の動きが幼児の間で繰り返される様子を，身体から表出する力動感や「情動価（vitality affect）」（鯨岡，1997）を感受し合い，共鳴・共振している姿としている。どちらのエピソードも相手と身体の動作や表情，声やリズムを合わせ，それを繰り返すことで，快の情動を互いに共鳴・共振させていると捉えられた。

イ．表情で通じ合う

エピソード3　同じ目的をもった仲間であることを瞬間的に分かり合える（10月）

【背景】

運動会ごっこの5歳児の取組として毎日のようによさこいソーランを踊ってきた。そしてこの日は初めて法被に袖を通し，3歳児，4歳児の前で初めて演技を披露することとなった。出番前の5歳児の幼児の仕草や表情，雰囲気から緊張感や期待感がひしひしと伝わってくる。

【エピソード】

保育者の太鼓の音と共に勇ましく入場し，よさこいソーランの演技が始まる。「どっこいしょー！どっこいしょ！」と大きな掛け声とともに，全身を使ってよさこいを踊る年長児のエネルギーが一体感を帯びて伝わってくる。一人ずつ間隔を空けて演技していたのだが，隣同士でどちらも全身を使ってダイナミックに踊っていたG男とH子の手と手がぶつかってしまった。2人は一瞬顔を見合わせて，お互いニコッと微笑み，再び前を向いて真剣な表情でより力強く踊りにうちこむ④。

エピソード3は，よさこいソーランを踊る中での出来事である。G男とH子は手と手がぶつかるアクシデントがあったが，何もなかったかのように，全身でより力強く踊るような印象を受けた（④）。この場面においてお互いが笑った理由については，2つの可能性が考えられる。1つは懸命に踊る中でのアクシデントとして，思わず笑ってしまったという可能性，もう1つは相手に何かメッセージを伝えようとして表情を敢えて作ったという可能性である。情動の表出を制御する力は幼児期後半から児童期に発達し（Cole, 1986），他方では「みかけの情動理解」もできるようになる（山本，2019）とされる。つまりここでは興奮した情動を制御して相手を慮って笑顔をお互いが見せ，そしてその笑顔に隠された意味をそれぞれが解釈して（例えば，お互いが踊りに打ち込む仲間であるといったこと等）受け取り，更に意欲を増して踊りに打ち込んだことが推測できる。

いずれにせよ，この事例では，踊りに真剣に踊っていた２人の間に起きたちょっとしたアクシデントについてお互いが微笑むことで，再び踊りに打ち込んでおり，これには笑顔という表情がお互いの情動を共振・共鳴を促したと捉えられた。

（2）情動の喚起

第２のカテゴリーは，相手の情動を喚起する役割である。一方が非言語的行動によって自分の意思を表示し，それにより相手に新たな情動が生起した事例を示す。具体的な非言語的行動として，動作・表情を用いていることが窺われた。

ア．思わず走りたくなるような動作

エピソード４　突然始まったかけっこ（10月）

【背景】

園庭で３歳児，４歳児，５歳児が順番に運動会遊びをしている。他の年齢の競技・演技中は，観客用の椅子に座って見たり応援しているが，競技と競技の合間の時間には，数名の幼児が立ち歩いたり，遊んだりする姿もある。

【エピソード】

４歳児のかけっこが終わった。次の出番は３歳児で，準備に少し時間がかかりそうである。椅子に座っていたＩ男とＪ男とＫ男が園庭に引かれた競技用トラックの辺りで戦いごっこを始める。それを見たＬ男もトラックまでやってきた。そして戦いごっこをしていたＩ男の背中にいきなり飛びつく。「やめて！」と叫んだＩ男はＬ男を突きとばす。３人の輪から外れるＬ男。３人は構わず戦いごっこを続けている。Ｉ男に拒まれたＬ男はトラックのライン上に立ち，３人の方を振り返り，「よーい，どん！」と言って３人から遠ざかるように突然走り出す⑤。すると，３人もＬ男を追いかけるように走り出した。Ｌ男につられて思わず走り出したような印象である。４人のそのままトラックを一周するような形で４歳児のかけっこのゴール位置まで走り終え，直後４人で笑顔でじゃれ合いのような遊びを始めた。

このエピソードは，Ｉ男たちと一緒に遊びたいＬ男が，突発的な行動をとることでＩ男たちの情動を揺さぶり，一緒に遊ぶことに繋がったという事例である。Ｌ男がＩ男の背中に飛びついたのは，自分もその輪に加わりたかったのだろう。しかしその行動はＩ男の怒りを買い，３人の戦いごっこに入ることは困難になった。そこでＬ男は突然走り出すという行動を起こした（⑤）。古典的な情動の理論として，James（1884）は身体的変化が興奮している事実の知覚を直接伴い，これらが起こす変化の感じが情動であり，身体的変化が先に在り，そこに情動が生起するとしている。この事例では，突発的に走り出したＬ男に対し，３人は「思わず」走って追いかけだしている。つまり，Ｌ男の行為からＩ男たちの走るという行為が誘発されており，その中で楽しいという気持ちが生起したのではないだろうか。掛け声とともに走り出すというＬ男の動作は，情動を喚起するような身体的変化を相手にもたらす役割をもつ非言語的的行動の１つとして捉えることができる。

イ．情動伝染を促すような表情

エピソード５　相手を引きつけるためのＭ男の方略（12月）

【背景】

遊戯室で，男女入り混じった７～８人ほどの幼児が木製大型積み木で宇宙船を作っている。その中に，Ｍ男，Ｎ子，Ｏ子，Ｐ子もいる。この時期，Ｍ男はＯ子達と一緒にいることが多く，Ｍ男は自分のしている遊びをＯ子達にもやって欲しい，自分の傍から離れないで欲しいと汲み取れるような言動が目立っていた。この日はＭ男はパイロット役，Ｎ子，Ｏ子，Ｐ子はネコ役になって宇宙船の中にいた。

【エピソード】

Ｍ男「お前ら，宇宙（宇宙船の外）に出るなよ，ゴジラが出てくるから」とＯ子達３人に言っている。それを聞いたからか，初めはじっとしていた３人だが，しばらくすると「ニャー」とネコの泣き真似をしながら，

四つん這いで宇宙船内を移動し出す。パイロットであるM男は，宇宙船の運転しながらも，3人の様子を常に気にかけている様子。「おいしい魚もあるから」と3人に魚を手渡す真似をしたり，宇宙船の後部側に歩いて行こうとするN子にそっと手をかけて方向転換するようにいざない，Uターンさせて元の場所に戻したり等，宇宙船にとどまって遊んでほしいというM男の思いが行動から窺える。そんな中，ふいに，O子が，宇宙船の外に出ようとする。それを見たM男が「危ない！」と叫び両腕をM子の前に広げる。そして目を大きく開けてびっくりしたような表情を見せ，「ハァ，ハァ」と呼吸を荒くしながらO子の方を見る。まるで危機的状況を寸前で回避できたような雰囲気である。O子もM男につられるように，『危なかった！』というような驚いた表情をM男に返す⑥。

M男はO子達を宇宙船（の遊び）に留めておくために，言語と非言語とを折り交ぜた様々な方略を用いていた。「ゴジラが出るから」と言って宇宙船の外が危険であることを意識付けしたり，「おいしい魚もあるから」とネコ役であるO子らの気を惹いたり，遊びから遠ざかろうとするN子に対して手を使って方向転換を促し誘導したりする等，実に様々な方法で3人をその場に留めようとしていた。

そして，O子がふいに宇宙船の外に出ようとした時には，「危ない！」の言葉と共に危機一髪という感じを表情と荒い呼吸を交えてO子に伝えている（⑥）。5歳児は本心とは異なり，緻密な表情を表出できるとされる（Gosselin, et al., 2011；Kromm, Färber, & Holodynski, 2015）が，事例においてもM男は，さも本当に危機一髪というような，本心とは異なる見かけの情動を表情により表出させたことが推察される。そのようなM男の表情を受けて，O子も同じように驚いた表情をM男に返している。O子の反応は，他者の表情を見ることで自動的な表情模倣が生じ，観察者にも対象と同様の情動が生起するという情動伝染のプロセス（Hatfield, et al., 2014）からの解釈が可能である。すなわち，O子はM男の驚きの表情を見ることで無意識にその表情を模倣し，その結果驚きの情動が実際に生起したことが考えられる。

つまり，遊びから離れようとしたO子に対して，M男は宇宙という設定を利用して危機一髪であることを示す表情を見せ，O子に「危なかった！」と思わせることで見事宇宙船内にとどめることに成功しており，そこにおいては表情という非言語的行動が相手に驚きの情動を生起させる役割を担っていることが窺われる。

（3）情動の強弱への作用

第3のカテゴリーは相手が既に抱いている情動を更に強めたり，反対に抑えたりする役割である。具体的な非言語的行動として沈黙・動作（身体の向き）・表情（視線）・身体接触が用いられていた。

ア．怒り情動を強める沈黙と身体の向き，視線による意思の表出

エピソード6　相手にしないことを示す態度（10月）

【背景】

運動会ごっこの5歳児の競技であるリレーの前には，毎回走る順番を決めるための「作戦会議」が行われる。この日はその作戦会議中にQ子の泣き声が聞こえてきた。P子との間にいざこざが発生した様子である。担任のX先生が2人を作戦会議から少し離れた場所に連れて行き，お互いの思いを聞いている。X先生の仲介の下で，P子もQ子も次第に落ち着いてお互いの思いを話せるようになってくる。しかし途中で作戦会議にX先生が戻ったために2人だけがその場に残る。

【エピソード】

Q子はP子に向かって真剣な表情で話している。先のいざこざについて納得しておらず，自分の言い分を伝えようとしている様子である。一方のP子は，懸命に話すQ子に対しての反応を示さず，P子の身体と視線は園庭の方を向いている⑦。「もう，なんで聞いてくれないの！？」と怒って訴えかけるような口調になるQ子。それを見ていた他の先生が，「聞いてほしいならP子ちゃんの顔見て言ってみたら？」と言われる。それを聞いて，Q子はP子の身体と視線の先に移動し，再び話しかけるが，P子は無言のまま素知らぬ表情で首を伸ばし，視線はQ子ではなく，Q子の後ろの運動会に注目しているようにして見せた⑧。すると，Q子，

「なんで見てくれないの！？」と，怒ったような表情を見せ，口調をさらに強めて泣き叫ぶ。P子は無言のまま表情も目線も変えずにいる。

X先生が去った後，P子に自分の言い分を伝えようとするQ子は怒りの情動を抑えて話をしようとしている印象であった。しかしP子の態度（⑦）に対して，Q子はP子が自分の主張を聞いていないと感じ，怒りの情動が増している様子である。この場面では，Q子はP子が自分の話を聞いていないことを，P子の身体と視線の向きから判断していることが窺われる。さらに，Q子の抗議に対してP子が示した視線や沈黙は，Q子にとって自分の話を聞いていない，あるいは自分を拒絶されたこととして受け止められ，そのために口調を強めて泣け叫んだのではないか。素知らぬ表情，身体の向き，沈黙などの非言語の行為は相手に向かい合おうとしない，いささか冷ややかな自らの情動を抑制したような態度である。相手を困らせる，怒らせるという点では効果的な方略であり，結果的に抑えていた情動が爆発したようにQ子は泣き叫ぶこととなった。

この事例から，抑えていたQ子の怒りの情動を強めたのは，Q子の言い分を全く聞こうとも受け入れようともしなかったP子の態度であり，そこには，沈黙・視線・動作（身体の向き）などの非言語的行動が作用していると捉えることができる。

イ．怒りの情動を抑えるような身体接触

エピソード７　相手を丸ごと包み込む（10月）

【背景】

この日の運動会ごっこの最後の競技は５歳児のリレーであった。走る順番や人数調整のために２回走る幼児を決める作戦会議がチームごとに行われる。

【エピソード】

作戦会議の場から突然R男の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。「２回走りたい！」と叫んでいる。どうやら，R男ではなく，他の幼児が２回走ることに決まったようだ。X先生や友達から何度もなだめられたり，他の案を打診されたりしていたが，受け入れらないR男は「うわーー！」と泣き叫び，ドンドンと思い切り地団太を踏みながら，リレー待機場である長椅子まで戻ってきた。長椅子にはR男と仲の良いT男が座っている。T男は，R男の方を見ながら両手を広げた。そして，R男が座ると同時に無言で抱きしめた。R男もシクシクと体を震わせながら，T男に自分の身体を委ねるようにもたれかかっている。しばらくT男はR男をだまって抱きしめ，そして，R男の涙を自分の服の袖で拭く⑨。あれだけ泣き叫んでいたR男の涙が止まった。その後，背を向けたT男に対し，バイクの２人乗りのように後ろから抱きつくR男。再び振り返ったT男に対して，R男も手を広げ，T男としっかり抱き合うような形をとる。R男は唇と尖らせて，T男の頬にキスをするような仕草をする⑩。R男の気持ちが落ち着いてきたことが仕草や雰囲気から感じられる。

リレーが始まった。R男は，走る前の掛け声にいおいて「えいえいおーー！」と誰よりも長く叫び，自分の出番も全力で走り切った。

２回走ることができなかったR男に対して，X先生や友達は，なだめたり提案したり等，様々な言葉でのアプローチを試みたが，R男の怒りは収まるどころか，逆に膨れ上がり泣き叫ぶようになる。そんなR男に対し，T男は何も言わずに抱きしめている（⑨）。その後も２人は身体のどこかが触れ合っている状態（⑩）であり，次第にR男は泣き止み，落ち着いていった。

R男は「２回走りたかった」という悔しい気持ちを分かって欲しくて怒りを表現していたのであり，他の提案やなぐさめを他者に求めていたのではなかったことが推察される。そしてT男の黙って抱きしめるという身体接触の行為は，R男がどんな理由でどんなことを考えているにせよ，何もかもを全て受け止めるというメッセージであり，それこそR男が求めていたことだったのではないだろうか。

保育者が園児を抱きしめるという行為は，園児の協調性と落ち着きを増し，不安を軽減する効果があるとされている（竹澤他，2007）が，T男の行動はそれに近いものであろう。地団太を踏んで泣き叫ぶくらい強く怒っていたR男の情動を抑えて落ち着かせることができたのは，R男の気持ちを受け止めたT男による身体接触と

いう非言語的行動であったと思われる。

Ⅳ．総合考察

1．研究結果のまとめ

本研究では，5歳児の情動に働きかける非言語コミュニケーションの特徴とその役割について明らかにすることを目的とし，幼稚園において非言語コミュニケーションに着目した自然観察を行い，幼児の非言語的行動が他児の情動に作用したと思われる事例を通して検討を行った。その結果，観察の視点としていた5つの非言語的行動，すなわち動作，表情，沈黙，身体接触，周辺言語（リズム・声量）のいずれもが観察された。また，それらが相手の情動にどのように作用しているのかを検討した結果，3つのカテゴリー，すなわち「共振・共鳴」「情動の喚起」「情動の強弱への作用」が見出された。

「共振・共鳴」では，動作・表情・周辺言語（リズム・声量）の非言語的行動が観察された。具体的には相手と動作や表情や声量，リズムを繰り返し合わせることや，表情を見合うことにより，お互いの情動を共有したり高め合ったりする役割となることが示唆された。

「情動の喚起」では，動作・表情という非言語的行動が観察された。具体的には相手の動作を誘発する動作や，相手に模倣を促すような表情を用いることで，相手の行動を変化させ，情動を生起させる役割があることが示唆された。

「情動の強弱への作用」については，動作（身体の向き）・表情（視線）・沈黙・身体接触の非言語的行動が観察された。具体的には相手の怒りを強めるような身体の向きや視線や沈黙，相手の怒りを抑えるような身体接触がみられ，相手の情動を強めたり弱めたりする役割があることが窺われた。

以下では，観察から得られた事例の特徴から，情動に働きかける非言語コミュニケーションを成立させる要因及び，非言語コミュニケーションと仲間関係について考察する。

2．情動に働きかける非言語コミュニケーションを成立させる要因

本研究の結果から，情動に働きかける非言語コミュニケーションが成立するためには，2つの要因，すなわち状況の中で複数の非言語的行動や言語が相補的に作用していることと，受け手の理解が関係していることが考えられる。

第1の要因について，例えばエピソード1における手を振る動作と声量やそのリズム，エピソード2の③における交互に行う動作や向かい合った時の表情のように，単体の非言語的行動というよりも，複数の非言語的行動が相まって非言語コミュニケーションが成立していたと考えられる。また，非言語的行動と言語が相補的に作用している事例も見られた。例えばエピソード4の⑤では,「よーいどん！」という言葉と共に走り出すことで,「かけっこするぞ」「ついてこい」という意図的なメッセージを成立させている。またエピソード5の⑥では,「危ない！」という言葉に加えて驚いた表情を浮かべることで「危なさ」に説得力を持たせているように捉えられる。つまり，非言語的行動と言語が絡み合うことで，より情動に作用する明確なメッセージとなっていると考えられる。更に，非言語コミュニケーション成立の背景には「状況」すなわち非言語的行動が行なわれた文脈の影響があると考えられる。例えばエピソード3では，よさこいソーランの演技中に手と手が触れたという状況だったからこそ，お互いの笑顔を見ただけで共鳴・共振できたと考えられる。エピソード4についても，年中のかけっこが終わった直後のトラック上にL男が立っているという状況だからこそL男の行為の意図が相手に伝わったと考えられる。Vargas（1986）が「すべてのメッセージは『状況』の中で考えることが望ましいというよりも，絶対に必要なのである」と述べているように，本研究において観察された非言語的行動は，いずれもその状況に置かれて初めて意味を成すものであった。以上のことより，情動に働きかける非言語コミュニケーションの要因の1つめとして，非言語コミュニケーションは，状況に置かれて意味を成すものであり，更に非言語的行動

同士が相まったり，言語と相補的に作用したりすることでより明確なメッセージとなり相手に伝わりやすくなることが示唆された。

次に，情動に働きかける非言語コミュニケーションが成立するための第2の要因，すなわち受け手の理解について考える。観察では，大人からすると一見通じていないように見えるような言葉のやり取りでも，幼児同士で理解し合えていると思われる事例が多数見られた。それは「微妙なニュアンスは表情や身振りや物理的活動的な文脈」（無藤，1997）により補っているからであろう。例えばエピソード６では，Ｑ子が，Ｐ子の沈黙や目線等から，自分と向き合おうとしないＰ子の意志を感受することで怒りの情動が強まったと捉えられる。このように，置かれた状況の中で言語的行動や非言語的行動が絡み合うことによりメッセージは明確になるが，受け手側もそれらを加味して解釈し意味づけていることが窺われた。今回の観察において，５歳児同士の非言語的行動の発信と受信の食い違いによるトラブルはほぼ見られなかった。情動調整，表情理解や心の理論の理解が発達してくる5歳児だからこそ，相手のメッセージを感受し，非言語コミュニケーションが成立しやすくなったと考えられる。以上のことより，情動に働きかける非言語コミュニケーション成立する要因として，受け手側の理解があげられ，５歳児は受け手の感受性も高まりより的確にメッセージを受け取れるようになることが示唆された。

3. 非言語コミュニケーションと仲間関係

また，非言語コミュニケーションの情動への作用のしやすさは，幼児同士の仲間関係の深さが関連していると考えられる。Dunn & Cutting（1999）によれば，特別な仲間関係にあるほど，情動の理解がしやすく，協調的な遊びが多く，葛藤が少ないとされる。本研究においても，エピソード１に記録されたＡ子，Ｂ子，Ｃ子の３人組は，複数の場面で共振・共鳴する様子が記録されている。この３人は所謂気の合う仲間関係である。また，エピソード７のＴ男とＲ男も気の合う仲間関係である。Ｔ男の抱きしめて落ち着かせるという行為は，Ｔ男とＲ男の関係性だから成立したとも捉えられる。本研究におけるこれらの事例は，幼児の仲間関係が，非言語コミュニケーションの情動への作用のしやすさに影響していることを示唆していると考えられる。

4. 今後の課題

最後に，今後の課題について述べる。第1には観察による事例抽出の限界が挙げられる。本研究では観察者が幼児の情動に作用したと捉えられる場面を事例としているため，分かりやすく表出された情動に焦点が当たってしまうことは否めない。他方で生起した情動を自律的に制御しているの事例抽出が困難であったため，今後はこれらの幼児についての検討が必要であろう。

第2には，仲間関係の影響についての詳細な検討が挙げられる。本研究においては，幼児の仲間関係が非言語コミュニケーションの情動への作用のしやすさに影響していることが示唆されたが，このことについてより詳細に検討するためには，例えば仲間関係に基づき幼児を抽出するなど，幼児同士の関係性に焦点を当てた観察を行う必要があると考えられる。

引用文献

芦田祐佳（2019）ネガティブな情動を表出する４歳児への保育者の援助と思考判断―関与の程度が異なる３つの援助場面に着目して―．保育学研究，*57,(1),* 29-42.

Cole, P. M.（1986） Children’s spontaneous control of facial expression. *Child Development, 57, (6),* 1309-1321.

Dunn, J. , & Cutting, A. L.（1999） Understanding others, and individual difference in friendship interactions in young children. *Social Development, 8, (2),* 201-219.

遠藤利彦（2021）総論：情動の発達・情動と発達．遠藤利彦（編著），情動発達の理論と支援．金子書房，2-21.

藤田　文（2021）幼児の協働行動における交代制ルールと非言語コミュニケーション．大分県立芸術文化短期大学研究紀要，*59,* 95-105.

藤田清澄（2011）遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味．保育学研究，*49, (1),* 9-39.

Gosselin, P. , Maassarani, R. , Younger, A. , & Perron, M.（2011）Children's deliberate control of facial action units involved in sad and happy expressions. *Journal of Nonverbal Behavior, 35, (3),* 225-242.

浜名真以（2022）幼児期の感情にみる「非認知」―感情にまつわる能力の発達と大人のかかわり．発達170，ミネルヴァ書房，60-65.

Hatfield, E. , Bensman, L. , Thornton, P. D. , & Rapson, R. L.（2014）New perspectives on emotional contagion：A review of classic and recent research on facial mimicry and contagion. *Interpersona：An international journal on personal relationships, 8, (2),* 159-179.

本郷一夫・平川久美子・高橋千枝・飯島典子（2021）幼児期における情動発達と行動特徴との関連．発達支援学研究，*2, (1),* 41-58.

岩田純一（1990）意味の発達．内田信子（編），新・児童心理学講座⑥ 言語機能の発達．金子書房，73-109

James, W.（1884）What is an Emotion? *Mind, 9, 34,* 188-205．福田正治（訳）（2005）情動とは何か．富山医科薬科大学一般教育研究紀要，*33,* 27-41.

勝野愛子（2019）"接面"の視点に基づく園生活での友達関係における５歳児の情動調整．保育学研究，*57, (2),* 18-29.

Koenig, M. A. , & Harris, P. L.（2005）Preschoolers mistrust ignorant and inaccurate speakers. *Child Development, 76, (6),* 1261-1277.

Kromm, H. , Färber, M. , & Holodynski, M.（2015）Felt or false smiles? Volitional regulation of emotional expression in 4-, 6-, and 8-year-old children. *Child development, 86, (1),* 579-597.

鯨岡　峻（1997）原初的コミュニケーションの諸相．ミネルヴァ書房．

鯨岡　峻（2006）ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性．ミネルヴァ書房．

鯨岡　峻・鯨岡和子（2001）保育を支える発達心理学　関係発達論入門．ミネルヴァ書房．

牧　亮太（2009）幼児のコミュニケーションの一様式としてのからかい：かんさつ・エピソード分析による多角的検討．乳幼児教育学会研究，*18,* 31-40.

松原未季・本山方子（2019）幼稚園３歳児の対人葛藤場面における教師の援助．次世代教員養成センター研究紀要，*5,* 165-174.

Mehrabian, A.（1981）*Silent messages：Implicit communication of emotions and attitudes.* Belmont, CA：Wadsworth.

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説．フレーベル館．

森田祥子（2005）乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望：保育の場を視野に入れた情動調整の発達の理解を目指して．東京大学大学院教育研究科紀要，*44,* 181-189.

無藤　隆（1997）協同するからだとことば．金子書房．

Navarro, J. , & Karlins, M.（2008）*What every body is saying.* Harper Collins Publishers. 西田美緒子（訳）（2010）．FBI捜査官が教える「しぐさ」の心理学．河出書房新社．

野澤祥子（2011）１～２歳の子ども同士のやりとりにおける自己主張の発達的変化．発達心理学研究，*22, (1),* 22-33.

野澤祥子・西田季里（2021）園における情動と発達．遠藤利彦（編著），情動発達の理論と支援．金子書房，82-93.

Richmond, V. P. , & McCroskey, J. C.（2004）*Nonverbal behavior in interpersonal relations.* Pearson

Education. 山下耕二（編訳）（2006）非言語行動の心理学―対人関係とコミュニケーション理解のために―. 北大路書房.
水津幸恵・松本博雄（2015）幼児間のいざこざにおける保育者の介入行動―気持ちを和ませる介入行動に着目して―．保育学研究，*53, (3),* 273-283.
砂上史子（2003）あそびにおけるからだをとおしてのかかわり．無藤隆・倉持清美（編著），保育実践のフィールド心理学．北大路書房，131-144.
砂上史子（2021）「おんなじ」が生み出す子どもの世界―幼児の同型的行動の機能―．東洋館出版社.
鈴木裕子（2009）幼児の身体的コミュニケーションにおける模倣の機能．教育実践学論集，*10,* 57-67.
高濱裕子・無藤　隆（1999）仲間との関係形成と維持―幼稚園期３年間のいざこざの分析―．日本家政学会誌，*50, (5),* 465-474.
竹澤博美・相守節子・牧野雅美・堀　親秀（2007）「抱きしめる」という効果．新田塚医療福祉センター雑誌，*4,* 17-18.
田中あかり（2013）幼児の自律的な情動の調整を助ける幼稚園教師の行動：幼稚園３歳児学年のつまずき場面に注目して．発達心理学研究，*24, (1),* 42-54.
田爪宏二（2018）実践研究におけるエピソード記録の方法．本郷一夫（編著），実践研究の理論と方法．金子書房，56-66.
田爪宏二（2022）発達支援のインフォーマルアセスメント．発達169, 14-19.
Vargas, M. F.（1986）*Louder than words:An introduction to nonverbal communication.* Iowa State University Press. 石丸正（訳）（1987）非言語コミュニケーション．新潮選書.
Warlaumont, A. S. , Richards, J. A. , Gilkerson, J. , & Oller, D. K.（2014）A Social feedback loop for speech development and its reduction in autism. *Psychological Science, 25, (7),* 1314-1324.
渡邉拓真・鈴木裕子（2022）幼児間で用いられる強い身体接触がもつ意味．愛知教育大学研究報告教育科学編，*71,* 8-16.
山本　信（2019）幼児期・児童期における情動表出の制御の発達に関する研究：みかけの情動理解と表情抑制の関係についての検討．東北大学大学院教育学研究科研究年報，*68, (1),* 95-109.
吉田真理子・竹村真菜（2016）4, 5 歳児におけるいざこざの第三者である子どもの介入行動の種類．三重大学教育学部研究紀要，*67,* 287-292.

付記

観察にご協力いただきました幼稚園の先生方，園児のみなさまに心よりお礼申し上げます。